

看護学生が実習で感じる達成感と臨床実践に対する不安 — 最終実習の前後における期待と体験に焦点を当てて —

Sense of accomplishment and uneasiness for the clinical practice that nursing
students find in training

— Focus on expectation and experience before and after the last training —

渡辺 千枝子 垣内 いずみ 嶋崎 昌子
Chieko WATANABE Izumi KAKIUCHI Masako SIMAZAKI

百瀬 ちどり 横山 芳子
Chidori MOMOSE Yosiko YOKOYAMA

要旨

本研究の目的は、看護基礎教育の最も重要な体験学習としての臨地実習を通じて、学生たちがどのような達成感を感じ、そのことがどのように学生を変化させてゆくのかを明らかにすることである。看護系短期大学3年課程の最終実習である「看護の統合と実践」の実習前後での学生たちの感じる看護実践への不安や期待、実習終了後の達成感を自由記述から分析した。

結果は、実習前は知識や技術の不安を抱え、患者との関係形成に不安を持っていた。反面、患者が学生のケアによって変化することへの期待も持っていた。実習終了後には、患者からの感謝の言葉に喜びを感じ、患者の回復や変化に看護することへの新たな決意を強くしている。また、指導者や教員から学生の存在を認めてもらったことにも自信を深めている。

実践科学と言われる看護学では臨地実習の占める割合は大きく、学生の看護職としてのアイデンティティの形成に大きな影響を与える。実習を通じて自己効力感を得られれば、卒業後の看護実践にも良い影響を及ぼすと考えられる。自己効力感を高めるためには患者との良好な援助関係の形成とともに、病棟スタッフ、教員の实習における学生への接し方も重要な要素である。

【キーワード】 看護学生 臨地実習 自己効力感 最終実習

はじめに

看護基礎教育における臨地実習は、看護実践能力の習得が大きな目標である。しかし、修得すべき内容が増大し、基礎教育では、基本的な理論や知識に基づく判断力の育成に重点が置かれる傾向がある。そのため臨地での実習時間は短縮される傾向にある。さらに近年の学生の傾向として、他人との関係を形成させることが苦手である。厚生労働省の報告書「看護基礎教育の充実に関する検討会」¹⁾においても看護学生のコミュニケーション能力の不足が指摘され、コミュニケーションの教育内容の強化が明示されていることから看護教育の課題であることがわかる。看護学生は、コミュニケーションによって患者と良好な関係を構築し、個性のある看護を展開することが求められるが、安部²⁾が指摘するように看護学生は、患者の反応の「解説」ができないことや「ネガティブ情動」によって、患者とのコミュニケーションを難しいと感じる程度が高まると考えられ、学生によっては、ベッドサイドへ行くことそのものにも時間を要する。さらに相川³⁾は、不安、緊張、あるいは怒りなどが統制できずに、適切にス

キルを実行できないと述べている。

実際の援助場面では、患者と良好な関係を作り看護を提供することが求められるが、コミュニケーションスキルや知識面の判断の未熟とともに時間がかかるのが現状である。そのため看護技術実践に限界があり、実践経験の貧弱化に拍車がかかっている状況である。これらの状況は、臨地実習に関する様々な不安を学生たちにもたらしている。臨地実習が効果的な学習の場となるためには、実習指導にかかわる教員や臨床指導者がどのように学生たちを指導し、看護援助活動の達成感や充実感、さらには学生自身が自己成長を感じ取れるかが重要である。自己成長を感じ取れることで、自信が着き、看護することへの欲びが生まれる。自己成長を別の見方から捉えたと、自己効力感になる。

自己効力感とは「自分にはこのような行動がこの程度できる」という自分の能力に対する信念のことである。言い換えれば、「自分はそのことをうまくやることができる」という自信のことである。自己効力感は成功経験が最も強い根拠になる。自己成長を感じるためには、学生の成功体験を導き出すことが

重要となる。平成 20 年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正により、看護現場に即した実習の導入がされた。「看護の統合と実践」である。これは看護基礎教育の内容と臨床現場で求められている能力の乖離に対応するものとして位置付けられた。臨地実習の最終的なものとして、学生が自らの力で看護を展開し、さらにチームの一員として動くことを期待している。3 年間の実習を通じて、自己成長、自己効力感を得ることが卒業後の看護師としての自己啓発や臨床看護を続ける源泉となり得るものと推測する。しかし、現代学生はなかなか自分に自信が持てない傾向もある。

そこで、「看護の統合と実践（以下統合実習とする）」の実習に焦点を当て、実習での自己効力感に影響する要因と変化について 3 年生の実習前後の自己効力感について比較検討した。

I. 研究目的

看護の基礎教育における最終実習前後での看護学生の実習に対する気持ち（期待感や不安感）の変化と影響要因を明らかにし、今後の学生指導に役立てる。

II. 達成感の定義

本研究では、学生の達成感・自己成長をバンデューラ¹⁾の提唱する自己効力感（一特定の状況で特定の行動を行うことができるという信念）に基づき実習での学生が「できた」という実感を持つこと。また、それにつながる肯定的な感情として「良かった、嬉しかったこと」とした。

III. 研究方法

1. 分析対象者

研究参加者は、看護系短期大学な在籍中の研究参加に同意した 3 年生 45 名である。

2. 研究期間

2013 年 9 月～2013 年 12 月

3. 研究方法

1) 質問紙によるデータ収集

①質問内容は、統合実習前は、自己効力感の予期期待として「実習に期待すること」また、それを妨げる因子として学生が持つ、実習に対する「不安に思うこと」を自由記述で回答を求めた。

②実習後は、達成感の指標としての肯定的な出来事や内容について「実習でうれしかったこと」や「自分が成長したと思うこと」その具体的な内容について自由記述で回答を求めた。否定的な内容についても「嫌だっ

たこと、悲しかったこと」として記述を求めた。

③統合実習の学内オリエンテーション時に質問紙を配布し、会場で回収する、集合調査を行なった。提出は退出時に指定の場所に任意で提出することとした。

2) データの分析

質問項目に従って学生が自由記載し、それを実習前は予期期待・不安の視点から、実習後は達成感・有用感の視点からカテゴリー化した。

III. 倫理的配慮

1) 対象者に次のような説明を口頭で行い同意を得た。

①研究目的と意義

②個人情報の保護

③研究協力の任意性

④辞退することによる不利益は生じないこと

⑤研究に使用する可能性があること

⑥データは研究者が責任を持って管理し、研究終了後は、シュレッダーにかけて破棄する

2) 本研究は、2013 年度松本短期大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て実施した。

IV. 結果

本学の最終実習である統合実習は、複数患者を受け持った看護過程の展開、また、実践を想定して、チームメンバーの一員として動くことを目標としている。管理的な要素の学修も組み入れている。

1. 実習前の記述結果

回収された回答は 45 件、記載された項目についてコード化、カテゴリー化し分類した。

1) 実習に対する期待

実習に対する期待の項目では、それまでの実習を振り返っての意気込みや自分の援助で患者が変化することへの期待が述べられている（表 1）。4 つのカテゴリーとそれぞれ 3 つのサブカテゴリーに整理できた。

表1 実習に期待すること

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
自分の成長	・知識や技術の向上	4
	・自分の成長に繋がる	3
	・新しいことを学べる	3
患者への良い影響	・患者の目標に近づく	3
	・その人にあったケアの実施	5
	・関わることで患者の変化	4
患者との関わり	・真摯な態度で接する	3
	・患者に精一杯の愛情を注ぐ	3
	・患者の満足の声を聞く	4
自分へのエール	・持てる力を精一杯発揮する	4
	・積極的に行なう	5
	・前出来なかったことができるようになる	4

2) 実習に対する不安

実習に対する不安では知識や技術の未熟、学習の不足に対する不安が多く、次に患者との関わりに関する不安、漠然とした不安の3つのカテゴリーと3～4のサブカテゴリーに分類できた(表2)。

統合実習以前の、それまでの実習を振り返り、患者に対して良かったのかどうかという確信が持てず

に不安を抱えたまま実習を続けている学生も多い。「漠然とした不安」の内容では、『看護師に向いているのか不安』や、指導者や教員の要求に応えられず『不認定になるのではないか』という自分の適性や実習そのものに対する不安内容の件数が最も多かった。

表2 実習に対する不安

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
知識・技術の不足	・看護の手技、知識の不足	6
	・記録が書けるのか不安	5
	・患者にあった計画が立てられるか	3
患者との関わりへの不安	・上手く関われるのか不安	5
	・コミュニケーションが取れるか不安	2
	・どんな患者を受け持つのか不安	3
漠然とした不安	・最後までやれるのか不安	5
	・看護師に向いているのか不安	2
	・合格できるか不安	11
	・体調管理・時間に対する不安	6

2. 実習終了後の記述結果

1) 実習を通じて「うれしかったこと」

「うれしかったこと」の記述では、35件の記述があり、『患者との関わり』と『指導者との関わり』の2つのカテゴリーと3～4つのサブカテゴリーに分類された。『患者との関わり』の中では、患者からの感謝の言葉をあげた回答が半数以上あった。学生の実習ならではの特定の患者と関わる時間が持てる

ことから、患者の反応や笑顔といった、患者の良い反応を引き出したことは学生の肯定的な感情に影響している。「指導者との関わり」では、『努力を認めてもらえた』ことや『成長した』といってもらえた事、『一緒に働けるといい』と期待されたことがある(表3)。

「うれしかったこと」がなかったと回答した学生も5名いた。

表3 実習を通じてうれしかったこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
患者との関わり	・患者からの感謝の言葉	15
	・患者の笑顔	5
	・患者の回復する様子	3
指導者との関わり	・努力を認めてもらえたこと	5
	・成長したと言ってもらえたこと	3
	・スタッフと緊張せずに関われたこと	2
	・一緒に働けるといいねと言われたこと	2

2) 実習を通じて「成長したと思えること、自分の変化したこと」

「成長したと思えること、自分の変化したこと」に関しての記述には、なかったと答えたものが5名いた。回答を整理分類した結果、2つのカテゴリーと、それぞれ3つのサブカテゴリーに分類された(表4)。「看護に対する姿勢」では、『視野が広がった』、『患者と関わることの楽しさ』が述べられた。「自分に自信が付いた」カテゴリーでは、患者を含めた

他者との関わりの苦手意識が少なくなったことを多くの学生が挙げている。また、指導者や教員から「あなたのこの部分はとても良い」と、自分の頑張りを認められ『褒められること』で自分に対する自信が付いている。実習を通じて、実習グループメンバー同士での関わりやスタッフ、患者との『人との関わりに自信が持てる』ようになり、自分の良いところにも眼を向けられるようになり、自信が持てたことに繋がっている。

表4 実習を通じての自分の変化

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
看護に対する姿勢	・視野が広がった	5
	・患者と関わるのが楽しくなった	6
	・考えて行動することの大切さ	4
自分に自信が付いた	・精神的に強くなった	4
	・褒めてもらえて自信がついた	7
	・人との関わりに自信が持てた	8

V. 考察

バンデューラは自己効力感を「ある人が持つ信念によってその人の態度や感情、行動が決定されていくように、個人の行動の予測を行なう際の重要な指標」と述べている。自己効力感に効果的に働きかけていくことで、その人自らの行動を望ましい方向へ変えていくことができる。

看護基礎教育では、臨地実習での患者やその家族さらには病棟スタッフとの複雑な看護場面を通じて、学生は自らの体験を意味づけし成長していく。本学の3年間の基礎教育の中で、学生は多くの困難な場面に遭遇する。特に臨地実習では、学生個々が一人で困難な場面に対峙しなくてはならない状況が発生する。その困難に直面したときに主体者として判断することが求められるのが実習である。

今回、基礎教育の最後の臨地実習である統合実習の前後に自己効力感尺度と自由記述を用いて学生の

変化を見た。自由記述の実習前後での結果について考察する。

1. 実習前の不安と期待

実習前では、それまでの実習を振り返り、患者との関わりが上手くできるのか、技術の未熟さが患者ケアを不安にさせている様子が見られた。また、看護師に向かないのではないかという漠然とした不安も抱えている。これらは、自己効力感の情報源の「自己の成功経験」の不足と考えられる。最終実習以前の実習において、成功経験が少なかったということになる。それが、患者と関わる事ができるのか、という不安や援助計画が立てられるのかという不安を呼び、実習を最後までやり遂げることができるのかという不安にまで発展させていると考えられる。

反面、期待することとして患者への良い影響と自分自身の成長を予想している。不完全燃焼のまま、あるいは疑問を持ったまま終わった実習では最後の

実習にける期待もあるのではないかと推測できる。何より学生たちが不安に思うのが、記録ができるか、ということである。教員も学生も看護過程の記録に重点を置いてきたことで、学生は患者との関わりが減少し、看護記録と格闘することに費やす時間が増えたことも否めない。実習指導教員からは記録を求められ、臨床指導者からは実践能力を期待される学生はどちらの要求にも十分にこたえられないことで不安を抱きながらの実習の連続であったと思われる。統合実習ではさらに複数患者と、チームメンバーの役割も求められる。不安は増す一方であるが同時に、新しいことを行なうことへの期待感もある。新たな知識や技術の吸収や、卒業後の動き方の予行演習的な部分から期待することもある。

2. 実習後の変化

実習終了後の達成感として、うれしかったことについて聞いた。バンデュエラの自己効力感では、人が行動を起こすときには、「効力予期」があるという。そのことをどれだけ上手くやれるか、という予測である。「効力予期」が高ければ、自信を持って物事に取り組むことができ、反対に低ければ自己否定状態となる。実習前、学生の「予期」期待は決して高くはなかった。逆に不安が強く、最後まで実習が続けられるかという不安さえ持っていた。実習後には概ね良い評価で終わっている。特に患者からの言葉は、学生たちには何よりのご褒美となっている。「ありがとう」という言葉を患者からもらえたことが自己肯定感に結びついている。予想以上に患者との関係が良好に発展したことが、自己効力感を喚起し、自分にもできるという実感が得られたものと思われる。さらに、指導者や教員から「あなたのこの部分はとても良い」と具体的に認められたことも大きな要因である。これは自己効力感に影響する成功体験に相応する。成功体験は最も強力な信念を生むとされる。安酸⁴⁾は「看護師や指導者の顔色を伺い、質問もできない雰囲気では学生の自己効力感が高まらない」と述べている。病棟スタッフや指導者、教員への安心感や信頼感が早期に形成されることは、実習を進展させる上で重要な要素である。また、実習前の不安の中に、実習グループメンバーとの不安があがっていた。終了後は逆に、メンバーについて、良いところが分かり協力できるようになったことが記載されていた。臨地実習では複数メンバーで実習に行くため、グループダイナミックスは重要である。実習グループのメンバーの行動を見て、「自分と同じような人が忍耐強く努力して成功するのを見ることは、観察する人に自分たちもそのようにできるという信念をわき上がらせ」、また「個人的な

自己効力感に対するモデリングの影響力は、モデルとの類似性に強く影響される」とされる。グループメンバーや病棟スタッフをモデル化し、自らも経験の「意味づけ」を深めていることが考えられる。「有能なモデルは知識を伝え、環境からの要求を管理するための効果的な技術や方略を観察者に与える」とバンデュエラは述べる。どのようなグループで実習するのも、学生の自己効力感を高める上では重要な要素であるといえる。

VI. 結論

統合実習の学習過程における学生の自己効力感に影響する要因について実習前後の自由記述から分析した。

1. 実習前では、新たな学習への期待があるものの、自らの知識や技術の不足に対する不安や、患者との関係形成に対する不安が強く見られた。
2. 実習終了後の嬉しかったことでは、患者からの感謝の言葉が最も多く挙げられた。また、病棟スタッフが学生に成長を認めたときやメンバーの中にモデルを見出したことによって自己効力感が高まっている。
3. 隣地実習では学生の成功体験を助けることが重要である。
4. 不安を抱えている学生に対し、実習早期に学生のがんばりを認めること、肯定的な関わりをすることで安心感が得られ、患者に対する理解も深まる。モデリングの役割が果たせるような実習環境を整えることも重要である。

おわりに

臨地実習は、看護基礎教育において重要な役割を持つ。本学では基礎分野Ⅰに続く基礎分野Ⅱの実習は3年次に開始し、半年にわたって続く。学生たちは6領域の実習をつぎつぎとこなしていかなければならない。その中で、成功体験を味わうことができる学生はどのくらいいるだろうか？

患者との関係が築けないまま終わってしまう実習もある。最終的に統合実習が位置づけられているが統合実習での満足度は、実習終了の満足感に近く実習そのものの満足感とはいえないかもしれない。多様化する学生と高度化する医療現場の橋渡しとして、看護基礎教育は益々煩雑化していくことが予想される。初学者である学生の気質を考慮しながら、有意義な看護実践ができ、学生が自己成長できる指導を行いたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省医政局看護課 (2007) . ; 「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書. Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>
- 2) 阿部智美 ; 日本看護研究学会雑誌 36 (1) 149-156 2013
- 3) 相川充 ; 新版 人づきあいの技術 ― ソーシャルスキルの心理学 . セレクション社会心理学 20 東京サイエンス社 2009
- 4) 安酸史子 (1999) ; 経験型実習教育の考え方、Quality Nursing、5 4-12,

参考文献

- 1) アルバート・バンデューラ著 ; ; 訳本明 寛 春木 豊 他訳 激動社会の中の自己効力 金子書房
- 2) 板野雄二 前田基成編著 ; セルフ・エフィカシーの臨床心理学 北大路書房 2002
- 3) 横山孝子 大澤早苗他 ; 学習過程の分析からみた学生の主体性の形成に関する一考察 保健科学研究誌 No2 59 - 68 2005
- 4) 宮脇美保子 寺岡三左子他 ; 4 年生大学における看護学生の職業的社会化 3 年次の隣地実習における体験に焦点をあてて (第 3 報) 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 4 (1) 2008